

## 保育園における小児看護学実習での学生の学習体験

糸井志津乃 松田葉子  
(Shizuno ITOI Yoko MATSUDA)

### 【要約】

保育園での小児看護学実習において、実習場面の学習体験の内容を明らかにし、今後の実習への示唆を得ることを目的とした。分析対象は、コミュニティ実習を実施した看護学科2年次生で研究の主旨を説明して承諾を得られた学生26名のまとめのレポートである。その結果、学生の学習体験は23のサブカテゴリーから5カテゴリーに分類された。学生の学習体験は、「子どもへの戸惑いを自覚する」ことから、子どもとの関わりに対して自分自身と向き合い、苦手意識を克服する体験をしていた。また、各年代の保育園のクラスに入り「年齢別の成長・発達を実感」し「保育士から子どもとの関わりを学ぶ」ことで、理解を深めていた。そして、子どもへの日常生活の援助を通して、「日常生活上の援助のあり方」や保育士たちの活動から「保育園の役割を知る」体験をしていた。

学生の学習体験からよりよい学びが得られていることがわかったが、学生個々の学習を共有する場が現在設定されていないことが、今後、学びを深めていくための課題となった。

キーワード：小児看護学実習、保育園、学習体験、看護学生

### 1. はじめに

本学では、2年次より1年間で「小児看護学概論」1単位30時間、「小児看護方法」1単位30時間の講義および「小児看護方法演習」1単位30時間の演習を行っている。講義・演習では、子どもやその家族を理解するために、子どもの各段階の身体・精神・社会面での成長・発達、および健康障害をもつ子どもの特徴的な疾病も含めて健康レベルにおける看護について教授している。また、2年次の春学期終了後の9月に小児看護学実習の位置づけとしてコミュニティ実習（小児看護学Ⅰ）があり、コミュニティで生活する子どもを理解するために保育園で実習する。ここでは、健康な子どもの成長・発達の理解と援助の方法、および育児支援の役割ももつ保育園の役割についても学べることを期待している。そして、3年次では、通年で小児看護学Ⅱの専門看護技術実習を行い、医療機関で入院している健康障害をもつ子どものケアを学ぶ形態となっている。

2年次の保育園での実習は、3年次に健康障害をもつ子どもや家族と関わるにあたり、学習効果として有効であるといった報告はいくつか見られている<sup>1) 2)</sup>。しかし、どのような体験が学生の学びへと発展しているのか詳細な記述が少ない。

さらに、本学の学生は各実習施設に2～3名配置され、教員は1週間の期間に、約23～25施設を巡回している。そのため、教員は学生の一人一人の学習状況を把握しているものの、具体的な学生の体験をすべて聞くことはできない現状がある。

そこで、本研究では、コミュニティ実習を実施している看護学科2年生を対象に、学生のまとめのレポートから、実習場面の学習体験の内容を明らかにし、今後の実習への示唆を得ることを目的とした。

### 2. 研究方法

#### 1) 分析対象

目白大学看護学部看護学科2年生95名のうち、研

究協力の得られた26名のまとめレポート

2) 期間：2008年9月8日～9月19日

### 3) 実習形態

小児看護学実習はⅠとⅡに分けられ、Ⅰの実習は、2年次に某自治体が管轄する保育園に1週間の実習を行う「コミュニティ実習」としている。

Ⅱの実習は、病棟での実習であり、健康障害をもつ子どもや家族を対象としている実習である。

コミュニティ実習で掲げている実習目的・目標、方法を以下に示す。

#### (1) 実習目的・目標

目的：各地域での保育園での役割や、通園する健康な子どもたちの成長発達を理解し、個々の成長に合わせた日常生活行動の援助を行う。また、少子化、核家族化などの社会状況を踏まえ、育児を行う家庭の状況を理解し、子どもの健康を維持・増進するために必要な環境および育児を支える援助について学ぶ。

#### 目標：

- ①乳幼児の身体的・心理的・社会的な成長・発達を理解する。
- ②乳幼児の発達に応じた生活環境・生活リズムを理解する。
- ③乳幼児と保育士とのコミュニケーションの特徴を捉え、積極的に関わることができる。
- ④成長・発達過程に応じた援助の一部を実施できる。
- ⑤地域における保育園の役割を理解し子どもとその家族に必要な支援を考察する。
- ⑥乳幼児期に必要な環境を踏まえ、看護職の役割について理解する。

#### (2) 実習方法

2～3名を1グループとし、実習期間は1週間で行う。1日は夏期休暇中に施設毎に保育園での現地オリエンテーション・見学を行い、9月に4日間連続の施設実習を行っている。

4日間のうちに0歳から5歳までのクラスに入り担任の指導のもとで、子どもたちへの援助を実施する実習である。

学生には、記録の課題として、①各年齢の発達状況

を観察し文献と照らし合わせた記録②実習終了後のまとめのレポートとして、テーマを自分自身で設定した学びの記録を提出することになっている。

### 4) 分析方法

分析は以下の手順で行った。①学生の最終のまとめレポートを精読し、学生の学びとなっている体験が記述されている内容を選び出した。②学生が記述した内容が意味していることを読み取り類似のものをまとめてサブカテゴリー化した。③サブカテゴリーの意味が共通しているものを合わせて抽象度を上げてカテゴリー化した。分析にあたっては、カテゴリー化の妥当性確保のために保育教育に携わる教員2名の協力を得て、計4名で検討した。

### 5) 倫理的配慮

実習終了後、実習施設ごとに研究の協力依頼を行い、承諾を得た学生に後日改めて研究目的、プライバシーの保護、成績には影響のないことなどを文章で提示し同意書への署名により研究参加の承諾を得た。

### 6) 用語の定義

コミュニティ実習：「コミュニティとは、居住地域を同じくし、生産・自治・風俗・習慣などで深い結びつきをもつ共同体＝地域社会を意味する。その中の一部である保育園で生活する健康な子どもの成長・発達について理解し、生活をサポートする保育園の役割について学ぶ実習。」

## 3. 結果

学生の記述内容を分析した結果、90記述が抽出され、実習の目的目標を参考に、5つのカテゴリーと23サブカテゴリーに分類できた。(表1)

### 1) 戸惑う自分自身と向き合う

このカテゴリーは、「子どもへの戸惑いを自覚する」「子どもからの接近で救われる思い」「積極的に関わる」「苦手意識がなくなる」の4つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は〈今まで、私の家族、親戚にも幼い乳幼児との触れ合いがなく、どのように子どもたちと接すればよいか分からず、変に力が入ってしまい逆に子ども達にも不安な気持ちが伝わり、怖がらせてしまうのでは

表 1 学生の学習体験

カテゴリー	サブカテゴリー
戸惑う自分自身と向き合う	子どもへの戸惑いを自覚する
	子どもからの接近で救われる思い
	積極的に関わる
	苦手意識がなくなる
年齢別の成長・発達を実感する	成長・発達の早さを実感する
	各年齢の成長・発達を知り興味をもつ
	同年齢での成長・発達の個人差を知る
保育士から子どもとの関わりを学ぶ	気持ちを汲み取った関わり
	一人一人の個性を踏まえながらの関わり
	楽しさ・知識・想像力を育む関わり
	場面を捉えてマナーやルールを教える
日常生活上の援助のあり方を学ぶ	個人のペースに合わせる
	丁寧に話しかける
	個々の「できる」レベルを把握する
	子どもの「やろう」という思いを大切に
	子どもの気持ちを受けとめる
	生活習慣を地道に習慣づける
	個人の生活背景を考慮する
	子どもの目線に合わせて関わる
保育園での役割を知る	人間関係や社会生活を築く基本を育てる
	健康教育を含めた指導
	育児への責任を学ぶ
	事故防止に努める

ないかと感じていた。(ケース16)と述べ、「子どもへの戸惑いを自覚する」。そして、学生は戸惑いを持ちながらも〈それは子どもたちによって救われた。初日の3歳のクラスは子どもたちの方から私に興味をもって近づいてきてくれたためそれをきっかけに打ち解けられた。(ケース7)〉というように「子どもからの接近で救われる思い」を体験していた。また、〈受身だけではいけないと思い、人見知りをする子とも仲良くなろうと考えた。私に興味があるものの、話しかけると恥ずかしいのかどこかへ行ってしまったが、少しずつこちらから話をしたり、一緒に食事をする事で2日目までには一緒に遊べるまでになった。(ケース7)〉と述べ「積極的に関わる」ことで困難を克服している。そして、〈子どもたちと触れ合ったことで、自分が子どものことを苦手だと思っていたが、それほどでもないことに気づけた。…みんなと遊んでいる時や甘えられた時などは、とてもうれしくて楽しくてすてきな時間であった。子どもに対する苦手意識も以前と比べて全くなくなった。(ケース13)〉のように戸惑う自

分自身と向き合い積極的に関わることによって苦手ではないことに気づき子どもとの関わりを楽しさも体験していた。

## 2) 年齢別の成長・発達を実感する

このカテゴリーは「成長・発達の早さを実感する」「各年齢の成長・発達を知り興味をもつ」「同年齢での成長・発達の個人差を知る」の3つのサブカテゴリーから構成されていた。

学生は〈1歳の子どものような成長しているということに驚いた。…身体的な発達では、上手に歩くことができる、手すりに掴まりながら階段を上り下りすることができる。『これ食べたい』『あれ僕のおもちゃ』など2語文が言える。おぼつきながらも歩くことができる、あまりこぼさずにスプーンをしようできるなどといった発達がみられ、心理的な発達では、嫌なことは嫌という、泣かずに自分のほしいものが示すことができるなどといったような発達を見ることができ、社会的な発達では、大人が入って貸し借りのやり

取りをするなどたくさんことができ、成長しているということにとっても驚いた。(ケース13)) のように具体的な発達状況を捉え、「成長・発達の早さを実感する」体験をしている。そして、「他者を意識することも年齢によって違いがでていて、とても興味深かった。2歳ぐらいからお友達と遊ぶことができるようになり、3歳では自己主張ができお友達と衝突することがとても頻繁になる。3歳の子たちはお友達と喧嘩しても、また仲直りすることが上手にできないが、5歳の子はお友達が喧嘩していると、間に入って喧嘩を止めることができるようになっていた。この変化にはとても驚き、興味深いものがあった。(ケース13)) と述べ、「各年齢の成長・発達を知り興味をもつ」ようになっていた。また、「5歳の子はいけないことをしているお友達を注意することができていて、さすが年長さんだと感心した。しかし、2歳の子の中でもお友達を注意することができている子もいて、個人差もあるのだなという学びもでき、子どもって本当におもしろいと思った。(ケース14)) というように「同年齢での成長・発達の個人差を知る」体験を通して、子どもへの興味へと発展する体験も見られていた。

### 3) 保育士から子どもとの関わりを学ぶ

このカテゴリーは「気持ちを汲み取った関わり」「一人一人の個性を踏まえた関わり」「楽しさ・知識・想像力を育む関わり」「場面を捉えてマナー・ルールを教える」の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は保育士の子どもの関わりを通して〈0歳児は言葉の代わりに泣くという行為で気持ちを伝えてくる。それをすぐに汲み取れる保育士は、やはりすごいと思った。そして、抱っこをしてあげることによって、泣き止んだりもする。実際に私も抱いて話しかけると自然と泣き止んだ。(ケース4)) と述べ、自分なりに「気持ちを汲み取った関わり」を観察し真似る行為のきっかけにしていた。また学生は保育士の行動と子どもの反応をみて〈関わった3歳の子は、発達が周りの子より遅く先生に甘えが強かったのもあるが、お腹が空いたり、気に入らないことがあるとぐずり出してしまう。なかなかお弁当を出さず先生が何度言っても聞かなかった。先生がその子から離れてみると、子どもながらにまずいと思ったのかしぶしぶ出し始めた。一人一人の個性を見ながら対応することが大切であると思った。(ケース5)) と述べ、「保育士が個性を踏まえ

た関わり」をしていることを理解している。そして、「保育士さん方は紙芝居や絵本、遊びの楽しさと同時に、子どもたちの知識や想像力を引き出すような工夫をしていった。紙芝居や絵本では子どもたちにあったレベルの問題を出しながら進めていき、さらに子どもを集中させることが可能になると思った。…このような工夫をするだけで興味も引き出すことができていた。とても良い学び方だと思った。(ケース5)) と述べ、「楽しさ・知識・想像力を育む関わり」について理解する場に遭遇していた。さらに、「3歳児は自己主張がとても強く喧嘩が1日に5・6回あった。口でも自分の言い分を言うが、手もでて掴み合いになることもあった。子どもたちが泣きながら喧嘩を始めると、保育士さんが両者の話を根気強く聞き、その上でどうしたら良いかを本人たちに考えさせていた。両者が納得できる解決方法を自分たちで解決させることで社会性や協調性を身につけていくのだと感じた。(ケース19)) といった問題状況に対して保育士が「場面を捉えてマナー・ルールを教える」といった教育的な関わりを観察し対応の仕方を学習している。

### 4) 日常生活上の援助のあり方を学ぶ

このカテゴリーは「個人のペースに合わせる」「丁寧に話しかける」「子どもの『できる』レベルを把握する」「子どもの『やろう』という思いを大切にする」「子どもの気持ちを受けとめる」「生活習慣を地道に習慣づける」「個人の生活背景を考慮する」「子どもの目線に合わせてかかわる」の8つのサブカテゴリーで構成されていた。

学生は保育士の指導のもとに日常生活行動の援助を体験し、日常生活上の全般的な援助に必要な情緒的な関わり方の学びを得ている。離乳食介助の際には〈離乳食での食事の時には、…一口の量、食べさせるペース、園児が他のことに気をとらわれないように『おいしいね』と話しかけてみたり、微笑みかけてみたりして、食事に集中できるように試みた。お腹いっぱいだったのか、急に食べるペースが落ちた時は、無理をさせず、時間を使って少量ずつ食べさせた。(ケース4)) というように、子どもの「個人のペースに合わせる」こと、〈0歳児と関わってみると、言葉がうまく発することはできないが、言葉を聞いているので、その反応に対して応答する仕草をしたり、話しかける言葉も丁寧に話すことが大切だと感じた。(ケース16)) という

ように「丁寧に話しかける」と言った表現で言葉の使い方や子どものスピードに合わせる必要性に気が始めている。そして、〈5歳は着脱に関わらず、ほとんどの日常生活行動は自立していた。私も衣服の着脱を手伝わせてもらったが、どの子がどのくらいまで自分一人で行えるのかを把握していなかったため、本当は一人で行える子なのに手伝ってしまった場面があった。(ケース20)〉「子どもの『できる』レベルを把握する」、〈0歳の子で、おやつ時間にさつまいもが出て食べる様子がなかった際に、口まで運んでみたが嫌がり食べようとはしなかった。今度は一口くらい大きさにして、さつまいもを手持たせてみたら、自分で口に運んで食べた。その体験から子どもが自立していこうとしている時に、私たちがすべてにおいて手助けしすぎてはいけないのだと思った。自分でやってみようとする気持ちを考え、また、それに対してその子ができるように援助していることが大切なのではないかと思った。(ケース16)〉「子どもの『やろう』という思いを大切にする」、〈自立しようとする気持ちの裏には、まだ依存心が強く残っているため、感情の揺れが激しくて癇癪を起こす場面も見られる。その場合は甘えたい気持ちをしっかりと受けとめてあげることが基本的信頼となり効果的であると思った。(ケース24)〉「子どもの気持ちを受け止める」、〈3歳児では社会的自立に向けて一人一人が努力している様子がうかがえた。例えば、箸の使用に関しては、家庭と保育園とで連携して教育しているため、上手く使いこなせている子どもがいた。まだ難しい子どもでも時間をかけて一人ずつ隣に座って地道に教えてみると、一生懸命見比べながら箸を使おうとする様子もみられ、最後まで投げ出すことなく自分のペースで食事をとることができていた。(ケース20)〉「生活習慣を地道に習慣づける」、〈3歳では、更衣を手伝ってと要求してくる子どももいたが、一度自分でやるようにと応えようと、だいたいの子が自分でできていた。中には最近、下に兄弟が出来たために今までできていたことをやらなくなった子どもがおり退行しているのだと気づいた。無理に自分でやらせようとせず、子どもの反応を見ながら接するように心がけた。(ケース2)〉「個人の生活背景を考慮する」、〈2歳と4歳児との関わりの中で、子どもの目線に合わせてしゃがんだり座ったりしながらコミュニケーションを図った。そうすることで、表情が良く見えるからである。何より表情が見えなければ相手の伝えたい

ことを読み取ることは難しい。相手の気持ちを読み取り、自分の気持ちを伝えたいと思えば表現することができた。(ケース2)〉「子どもの目線に合わせてかわる」といった援助のあり方について体験し学びを得ていた。

## 5) 保育園の役割を学ぶ

このカテゴリーは「人間関係や社会生活を築く基本を育てる」「健康教育を含めた指導」「育児への責任」「自己防止に努める」の4つのサブカテゴリーで構成されていた。

〈保育園は、…これから小学校へあがる子どもたちが集団生活の練習をし、社会性や協調性、ルールやマナーなど人間関係や社会生活を築く中の基礎的なことが保育士さんたちと関わることで、自然に身につく施設であると感じた。(ケース26)〉「人間関係や社会生活を気づく基本を育てる」、〈細かく手洗いの指導を行っていた。乳幼児は手づかみで食べることもあるので、不潔な手で食物を食べて菌が入り下痢をおこさないよう食前に行っていた。また、食物のついた手で他の者を触り部屋の中が不潔にならないよう食後にも行っていた。さらに、外で色々な物に触れて汚れている手を清潔にするよう帰宅時に、手洗いをを行う習慣をつけさせていた。1歳の時点では保育者が見守りながら出来ないところは手伝っていたが、2～5歳くらいになれば一人で手を洗えるようになっていた。歯磨きは3～5歳で歯磨き指導を行うようになっていた。(ケース24)〉「健康教育を含めた指導」、〈園児の大切な成長に対する責任と健康に過ごせる保育園側は、保育士間でのチームワークをもって何かあるときはすぐに話し合って対処をとりつつ園児に注意を払っていた。(ケース4)〉「育児への責任」、〈保育士は事故予防のため、一人一人を色々な角度から見注意を払っていると実感していた。子どもは想像もしていないような行動をとる可能性がある。そのことを頭に置いて子どもと接し環境整備や危機管理の一端を学んだ。(ケース22)〉「自己防止に努める」といった内容について体験し学びとしていた。学生が保育士の活動を見ていく中で、また、保育士と連携をとりながら子どもと関わることで、学びを深めていた。

#### 4. 考察

##### 1) 自分自身の戸惑いと向き合う体験を通して、子どもとの苦手意識を克服する

学生は幼児期の子どもとの関わりが少なく、不安や戸惑いを抱いており、子どもからの接近によって最初の関わりのきっかけを得ていた。また、自ら積極的にかかわりを持ち苦手意識を克服していた。

今回対象とした学生は、1989（平成元）年の出生であり、合計特殊出生率1.57の時代である。学生たちの世代は同学年も少なく、その後も少子化が進行している時期でもあるため<sup>1)</sup>、他学年の交流も少ない世代である。そのような学生にとって、未知なる子どもたちとの関わりは、不安材料になるのであろう。

幼児期の年齢別の成長・発達を実感する体験を通して、特徴を理解しつつ、子どもからの無邪気な接近をきっかけにして、自ら積極的に関わり、自分なりに苦手意識を克服する体験もしていた。この克服体験は、成功体験ともなり、3年次になって健康障害をもつ子どもとの関わりへの自信に結びつく可能性が高いと考えられる。

##### 2) 成長・発達の早さを実感し、各年齢の成長・発達を知り興味をもつことで、年齢別の成長・発達を学ぶ

学生は成長の早さに対する新鮮な驚きが、興味へと繋がっている表現をしていた。新鮮な驚きが学習への動機となり各年齢の成長・発達に対して学習が深まっていることが推察される。保育園での実習は、各年代のクラスに入り、可能な限り0歳から5歳までの子どもたちと関われるように保育園へ依頼している。日々異なる年代と関わることによって、年齢間の比較を通して学びが深まっていた。短い期間の実習ではあるが、同年齢での成長・発達の個人差を知ることができ、健康な子どもの成長・発達についての学びは、具体的な場面からの学習体験がよりよい影響を及ぼしている。

保育園実習の学生の変化における研究でも<sup>4) 5) 6) 7)</sup>実習後では具体的に子どもの特徴をつかめるようになり、その後の病児との関わりにより効果が得られていた結果がある。4日間の実習で、可能な限りさまざまな年代を見ることにより、比較検討ができる環境は、各年代の理解につなげられ、今後の実習効果に影響がみられると考えられる。

##### 3) 保育士と子どもとの関わりの観察を通して、子どもとの対応について学ぶ

学生は保育士の「気持ちを汲み取った関わり」「一人一人の個性を踏まえた関わり」「楽しさ・知識・想像力を育む関わり」「場面を捉えてマナー・ルールを教える」といった対応に納得し、行動を真似ることで対応の仕方について学びを広げていた。また、教育的な対応の必要性は、講義等で理解しているものの、実際の具体的な場面でどういう風に関わるのか、学生にとってはイメージしにくい。保育士が子どもの行動を観察し教育の機会として見逃さずに対応している姿は、具体的な関わり方のモデルになっていた。網野らの研究でも、子どもとの関わり方は戸惑いながらも保育士をモデルとして子どもと関わっていくことにより、次第に子どもに対応できるようになっていくという結果がみられた<sup>3)</sup>。本学の学生においても、同じ様な効果がみられていた。

また、保育士の子どもへの対応は、健康障害をもつ子どもへの対応においても必要な姿勢である。子ども全般での学習においては、保育園での実習は効果的な実習ともいえる。

##### 4) 日常生活行動の援助を通して、日常生活上の援助のあり方を学ぶ

学生は実際に子どもの日常生活行動の援助を通して「個人のペースに合わせる」「丁寧に話しかける」「子どもの『できる』レベルを把握する」「子どもの『やろう』という思いを大切に」「子どもの気持ちを受けとめる」「生活習慣を地道に習慣づける」「個人の生活背景を考慮する」「子どもの目線に合わせてかかわる」といった対応を体験し、子どもに必要な関わりとして意味づけをしていた。子どもの意欲を促進し、個々の子どもの状況に合わせて、日常生活上の援助のあり方を習得していることが理解できた。

##### 5) 保育士の活動を通して保育園の役割を学ぶ

子どもの健康を維持・増進するための対応を習得するには、子どもとの成長発達を知り、子どもに必要な関わり方や必要な環境を理解していることが必要である。学生たちは、子どもに対する関わりへの不安を抱きながら、子どもと寄り添い、保育士との子どもとの関わりを参加観察しながら子どもに対する理解が深まっている。

学生が保育士の活動を見ていく中で、また、保育士と連携をとりながら子どもと関わることで、学びを深めていたことは、学生が主体的に子どもや保育士と関わることであったことが推察できる。

しかし、保育園の役割については一部の学びしか得られていなかったことは、学生にとって子育て支援という視点にまで十分に目を向けられていない可能性がある。近年、保育園の役割にも大きな変化が生まれており、「利用家庭に対する子育て支援」が役割の一つにあげられるようになった。現在の実習では、保護者の送迎をみる機会がなく、実習中に保護者との関わりがないことも影響している可能性がある。今後、実習施設毎の状況に合わせ、子どもと保護者との関わりが場面が見られる実習も検討の必要があるだろう。

また、より学習の視点を広げていくためには、小児看護学概論での学びに立ち戻る機会が必要と思われる。実習場を離れ学生間での討論の機会を設けることによって、学生個々の気づきや学びを共有し、基礎的な知識の統合の場となるのではないだろうか。学生たちの知識面での学習不足がある場合には補足説明を入れるなど、今後、授業および実習方法も含め検討していく必要がある。

## 5. 結論

- 1) 学生は子どもとの関わりに対して戸惑い抱いていたが、子どもからの接近によって救われ、自分なりに積極的に関わって苦手意識を克服する様子が見られた。
- 2) 学生は子どもとの関わりや、保育士の関わりを観察することで、各年代の成長・発達の特徴を実感しながら理解していた。
- 3) 子どもへの援助を体験しながら、具体的な対応方法について学び、看護師にとって必要な姿勢についても習得していた。
- 4) 子どもたちや保育士との関わりから、援助する側の姿勢について学んでいた。
- 5) 保育士の活動を観察することで、保育園の役割の一部を学んでいた。

## 6. 今後の課題

学生たちは、実習によって成長発達の視点では十分に理解が深められていた。しかし、保育園での役割の視点へと学びを広げるためには、小児看護学概論での学びに立ち戻る機会が必要と思われる。実習場を離れ学生間での討論の機会を設けることによって、学生個々の気づきや学びを共有し、基礎的な知識の統合の場となる方略の検討も必要であろう。今後の課題としたい。

### 【注】

- 1) 齊藤理恵子, 能登静子: 看護学生の保育園実習と病院実習における子どもの理解—小児看護学実習後アンケートより— 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要. 1, 26-32 (2004)
- 2) 高橋千恵子, 室加ヨシ子: 小児看護学実習における保育園実習での学び—実習記録物からの内容の分析. 日本社会保険医学会総会プログラム・抄録集. 41, 202 (2003)
- 3) 網野裕子, 高橋紀美子: 保育園実習4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもとの関わり方の変化. 岡山県立大学保健福祉学部紀要. 5, 93-100 (2009)
- 4) 馬淵直子, 八木美由紀: 保育園実習における学生の「子ども観」についての内容分析. 近畿高等看護専門学校紀要. 8, 42-45 (2008)
- 5) 柴邦代: 小児看護学実習での学生の学びにおける保育体験の効果. 愛知きわみ看護短期大学紀要. 5, 33-40 (2009)
- 6) 由川美礼: 看護学生の子どもに対する感情の変化. 保育園実習・病院実習での体験を通して. 神奈川県立保険福祉大学実践センター教員養成課程看護教員養成コース看護教育研究収録. 31, 130-136 (2006)
- 7) 東野充成, 松木美奈子, 大池美也子: 保育園実習に見る看護学生の子ども観. 九州大学医学部保険学科紀要. 5, 77-85 (2005)
- 8) 高橋泉, 野中淳子, 田中博子: 看護学生の体験場面から学びに至るまでの思考パターンの分析—保育園実習後の課題レポートより—. 日本看護学教育学会学術集会公演集. 12, 214 (2002)

